＜ウエストサイドストーリー＞

ドイツやフランスで演じられていたオペレッタに踊りの要素も付け加えられたショウがアメリカに移され、ニューヨーク（その後ロンドン）などを中心にミュージカルとして発展していった。

ミュージカルではR. ロジャース（サウンドオブミュージック 1959)、フレデリックロウ（マイフェアレディ 1956）などが知られているがいずれも甘美なメロディを中心にしたわかりやすい大衆向けの作品であった。

1957年当時39才の異才バーンスタインは（ピアニスト、作曲家、指揮者としても活躍に20世紀のモーツァルトとも呼ばれた）ミュージカルに新しい波を作り出した。これがウエストサイドストーリーである。この作品の中には大衆向けの曲も含まれているが、複雑なリズムや不協和音、ジャズの活用など斬新な内容がみられる。上記のサウンドオブミュージック（ドレミの歌、私のお気に入り他が有名）が書かれた時期とくらべるとその斬新性はあきらかであろう。

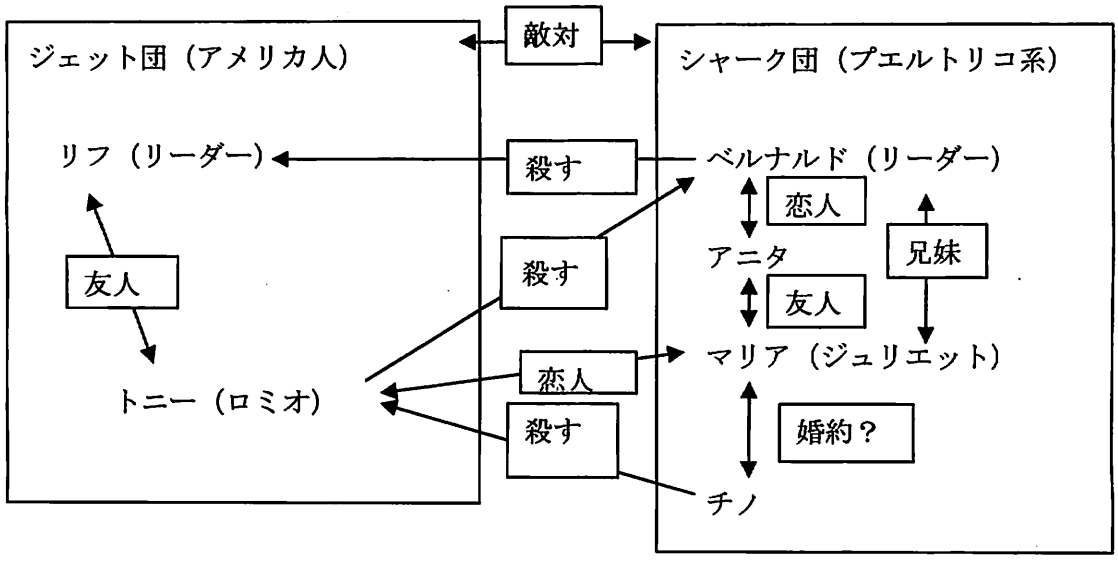
＜あらすじ＞

ジェット団(白人系)とシャーク団(プエルトリコ系)はニューヨークのウェスト・サイドの不良少年のグループである。今にも爆発しそうな空気のなかでのダンスパーティー、そこで一目で愛し合うようになった二人、マリア(ナタリー・ウッド)はシャーク団の頭のベルナルド(ジョージ・チャキリス)の妹であり、トニー(リチャード・ベイマー)はジェット団の頭リフ(ラス・タンブリン)の親友だった。ジェット団とシャーク団はついにぶつかってしまった。マリアの必死の願いにトニーは二人の間に飛びこんで行ったが、血気にはやる彼らはトニーの言葉に耳をかそうとしなかった。

リフはベルナルドに刺されて死んだ。親友リフの死に我を忘れたトニーはベルナルドを殺してしまった。

ベルナルドの恋人アニタ(リタ・モレノ)に責められてもトニーを忘れられないマリアは、トニー逃亡に同意する。シャーク団のチノは「ベルナルドの仇」を打とうとトニーをつけ狙い、警察の手ものびてくる。アニタはマリアの愛の深さを知り、トニーと連絡をとるために街へ出ていくがジェット団にからかわれたアニタは「マリアはチノに殺された」と（ウソを）言ってしまう。絶望して夜の町へ飛び出したトニーの前へ拳銃を構えたチノが現れた。急を聞いて来たマリアの腕の中で、トニーは絶命した。

＜ウエストサイド物語　主な登場人物＞



ドック

ドラッグストアの店主。ジェッツの少年たちにとってただ一人の理解者。「ロミオとジュリエット」のローレンス修道士にあたる。

舞台芸術研究
前期第４回「ウエストサイドストーリー」

CLASS　　No.　　NAME

（1）　「ウエストサイドストーリー」の総合的感想を書いてみましょう。

（2）　「ミュージカルの持つ魅力」について自由に書いてみましょう。

※舞台芸術研究前半４回は終了になります。後期や来年に向けて、何か全般にご意見あれば書いてください。

ポーランド系などのアメリカ人少年達で構成されている非行グループ・ジェット団は、最近力をつけてきたプエルトリコ系アメリカ人の非行グループ・シャーク団と、地元の唯一の広場である屋上運動場の占有権を巡って敵対関係にあった。一触即発の状況が続くある夜、中立地帯であるダンスホールで顔を合わせることになった。初めてのダンスパーティに期待で胸を弾ませていたマリアは、そこでトニーという男性に出会い、恋に落ちてしまう。2人は口付けを交わすが、マリアがシャーク団のリーダー、ベルナルドの妹であり、トニーは以前ジェット団のリーダーだった。

キャスト

- マリア（ナタリー・ウッド、歌はマーニ・ニクソン）
- トニー（リチャード・ベイマー、歌はジム・ブライアント）
- ベルナルド（ジョージ・チャキリス）
- アニタ（リタ・モレノ、歌は一部ベティ・ワンド）
- リフ（ラス・タンブリン）
- チノ（ホセ・デ・ヴェガ）
- アイス（タッカー・スミス）

吹き替え問題

主役級の俳優たちの歌は大部分が吹き替えられており、吹き替えの歌手の名前は映画でもサウンドトラックアルバムでもクレジットされていなかった（現在販売されているものにはクレジットされている）。これは当時広く行われていた慣習であったが、後にいくつかの問題に発展した[2]。

特に大きな問題となったのはナタリー・ウッドの吹き替えである。ナタリー・ウッドは自分の声が使われると信じて撮影を行っていたが、裏ではマーニ・ニクソンによる吹き替えが決められていた。撮影終了後に初めて自分の声が使われないと知ったウッドは激怒したと伝えられる。そのため、ニクソンの録音はウッドの協力のない状態で行わざるを得ず、アップショットの場面を中心にウッドの歌い間違いの修正に苦心した上、最後のシーンのマリアの「触らないで!」（“Don't you touch him!”）「大好きよ、アントン」（“Te adoro, Anton.”）の台詞吹き替えまで行うことになった。このことからニクソンは、サウンドトラック・アルバムの売上の一部を要求するに至ったが、配給会社もレコード会社もこれを聞き入れず、結局はバーンスタインが自主的に報酬の一部をニクソンに回すことで解決を図った。

他にも、アニタの吹き替えを担当したワンドが訴訟を起こし、サウンドトラックの売上の一部を受け取ることで和解している。

日本語吹替

musical number

Music by Leonard BERNSTEIN/ lyricksby by Stephan SODHEIM
音楽 レオナルドバーンスタイン/ 作詞 スティーブン・ソンドハイム

★歌詞は全てOfficial site　にでています→♪

Prologue	プロローグ	オーケストラ 演奏	最初の「ダンシングおにごっこ」と「指パッチン」でおなじみの、ジェット団とシャーク団との対立の様子を、 アレグロ・モデラートで不安な空気を表した音楽。 プロコフィエフの「ロミオとジュリエット」から ヒントを得たのでは・・と勝手に思っている。 (佐渡裕もそう言ってたとのが) そういえば、「ピーターと狼」にもちょっと似てる気が。
Jet Song	ジェット・ソング	リフ、ジェット団	ジェット団の団結の強さを歌う。Prologueを元に歌をつけた。
Something Coming	何かがやってくる	トニー	「何か奇跡のような素晴らしいことが起こる予感がする」というトニーがワクワク感を歌う。 この曲を聞くと、何かいい事あるんじゃない?・・気がしてくる。
The Dance At The Gym	体育館のダンス	オーケストラ 演奏	ブルース、パソドブレ、マンボ、チャチャ・ジャンプと、 色々なリズム・テンポの曲が盛りだくさん。 「Maria」と同じメロディラインのチャチャが美しい。 マンボは「キューティーハニー」と「ひょっこりひょうたん島」の 出だしに似ている。
Maria	マリア	トニー	恋の喜びを、マリアの名を連呼しながら歌う、。 まるで、柔らかい灯りが次々に灯されるような甘美で暖かい旋律。 (映画でも、窓の光が印象的に使われている)
			プエルトリコとアメリカを風刺しながら、スペイン舞曲等の 民族色盛りこんだダンスナンバー。

America	アメリカ	アニタ、 シャーク団	アメリカ国歌「星条旗」(ソーミドーミーソード～♪)が モチーフになっている(と、思う) ちなみに、喧嘩会議の時、シュランク警部補に店から追い出された シャークスが吹いている口笛は、皮肉をこめたアメリカの愛国歌、 「Tis of Thee」(イギリス国歌と同じメロディー)
Tonight	トゥナイト	マリア、トニー	このミュージカルを象徴するトニーとマリアの二重唱。 オペラティックな歌の山場となる。 ベンジャミン・ブリテンのオペラ「ルクリーシャの陵辱」の「おやすみ」 を、引用したと言われている。 もともとOne Hand,One Heartがこのシーンで使われる予定だったが 賛美歌のようで神聖すぎる、との理由でQuintet　から抽出されて 作られた。つまりQuintetの方が元だった。
Gee,Officer Krupke	クラプキ巡査	ジェット団	社会風刺がきいたコミカルナンバー。 (ラスト部分のズッコケフレーズ、 「チャッチャカチャチャッチャ・うん・チャ・チャ」は バーンスタイン作曲という事だろうか?)
I Feel Pretty	すてきな気持ち	マリアとコンスエロ、ロザリア、フランチェスカ	マリアのウキウキ感をフラメンコのリズム等も交えて、 プリティ～に歌う楽しい曲。
One Hand,One Heart	ひとつの手、ひとつの心	マリア、トニー	トニーとマリアのアダージョ。 元々、バルコニーのシーンでマリアとトニーの愛が深まるシーンとして 使われる予定だった。
Tonight　(Quintet)	クインテット （トゥナイト 五重唱)	マリア、トニー、アニタ、ジェット団シャーク団	ジェット団・シャーク団・トニー・マリア・アニタ、 それぞれの「Tonight」の思いが掛け合いになる五重唱。 バーンスタインのオペラティック手法で ミュージカルナンバとしては画期的。
The Rumble	ランブル	オーケストラ 演奏	決闘のダンス場面。 プロローグと同じメロディ・ライン(!) メロディ・リズムの一つ一つに合わせた振り付けは見事。
			決闘を前にに「クール」になれ、とアイスが(舞台ではリフが)

Cool	クール	アイス、 ジェット団	言い聞かせる歌。 モダン・ジャズのコンボ的な感覚で書かれたバーンスタインの 音楽センスが光る。 ゲゲゲの奇太郎の曲はここからヒントを得たと勝手に思っている。ピンクパンサーも似てるけど・・
A Boy Like That and I Have a Love	あんな男に／私は愛している	アニタ・マリア	アニタがトニーは人殺しだと歌い、それに対して マリアがトニーへの愛の強さを歌う。 オペラティックな手法で書かれ 音楽的最大の山場となる。(山場が多い!) この曲の中で流れるメロディが、ワーグナーの 「ニーベルンクの指環～愛の復活のテーマ」の パクリであることは有名らしい。
Somewhere	サムホェア	マリアとトニー	どこかにきっと二人だけの新しい世界がある、、幸せな 平和な世界のビジョンを夢見る。 ベートーヴェンの「皇帝」の第二楽章のメロディを一節で使っている。 個人的にはワグナーの"トリスタンとイゾルデ"のイゾルデの死 が浮かぶ。同時期に作られたキャンディードの中の make our garden glow　は、この曲の続編のような気がする。

映画版の編曲はソール・チャプリンが担当。
オーケストラ楽団を限定せず、各分野６５名の演奏者を集めて演奏。
他にもマンボバンドが「The Dance At The Gym」「America」等を担当。
また、ジャズのシェリー・マン(ドラム、レッド・ミッチェル(バス)ピートコンドリ(トランペット)などの
ジャズの名手が「Prologue」「The dance at the gym」「Cool」の背景音楽を演奏。
音楽部分はトータルで52分30秒。指揮はジョニー・グリーン。

宮川彬良氏による　WSS音楽解説

バーンスタインは意識的にか、音一つ一つに意味を込めている。
骨だけで全てを語るムダのない音楽である」
オーケストラでなく、たとえピアノ１本だけで弾いたとしてもメロディーで世界が変わる。

全体の基本となる**ド**と**ファ♯**の音は音楽理論上もっともハモらない、親戚でない、敵対した音。
つまりシャークとジェットとの関係を表す。
プロローグ、口笛の出だし部分(ソドーファ♯)は**ソ**と**ド**という響きあう「家族」のような音に仲の悪い**ファ♯**が加わる。
そして"あなたが敵の**ファ♯**じゃなくって**ソ**だったら良かったのに・・"と、**ドファ♯ソ～**の**Maria**のメロディーが生まれる。
又、**COOL**では**ドファ♯・ソファ♯ド**　と、心が揺れ動く。
ラスト、**Somewhere**の１節、とても希望的な**レミー**という響きに低い**ファ♯**が響く。
希望の中にも対立は常にある、という事を表現している。
※追記・・よ～く聞いてみると、最後に**ファ♯**から**ソ**に、さりげなく半音移行している。平和の兆し?

(　「J-WAVE、Classy cafe('05) 」「NHKわくわくラジオ～アキラさんの音楽ドレミ塾('06)」より)

◎バーンスタインの音楽の魅力、

"何かをする時にはそれに対する愛情ゆえに必ず全身全霊を込めて取り組む"
主義の彼自ら、WSSは「自分の子供」「神が宿った」と語る作品。

♪♪♪♪♪♪

♪「ゆうべの初演は私が夢に描いたとおりになった。芝居の筋も曲もまるではじめて見聞き
するような気分で泣いたり笑ったりした。」
(**バーンスタイン**談　1957年8月19日、ワシントンの初演を見て)

♪「ラジオから流れるポピュラーソングやシナゴーグ(ユダヤの教会)で
昔ながらに奏でられる音楽を聞いて育ったバーンスタインの曲には、常に
最も通俗的な音楽と神聖な音楽の、両極端である両方の音楽の影響が見られる」
(　**デイリー・テレグラフ紙**　1994年～　バーンスタインの伝記より)

♪どこかで誰かが僕の曲を口笛で吹いているのが聞こえる・・・1度でいいからそんな体験をしてみたい」
と、まだ作曲家としてのヒットがなかったバーンスタインは語ったそうだ・・・口笛どころじゃないでっせ。
ダンスだけ見ていても音楽が聞こえ、音楽だけ聞いてても踊っている姿が浮かぶ・・
まさに「卵が先か二ワトリが先か」・・登場人物1人１人が音符のようで、動きは音楽記号、
メロディーがストーリー。カラフルな音色、複雑な不協和音、美しく転がるようなハーモニー、そんな音達が

ある日ある時のウエストサイドでの出来事を物語っている。
様々な作曲家、ジャンルの音楽の魅力を熟知した上で作られた曲は、まるで「音楽の万博」・・
WSSナンバーだけで、あんな作曲家やこんなジャンルの音楽・・と色々なエッセンスが味わえる。
ミュージカルナンバー、映画音楽、という狭いジャンルでは納められない。
作曲家・吉松隆も言っていたが **20世紀最高のクラッシック作品** ・・・私もそう思う。 (By **店主**)

◉映画版吹き替え

Maria	**～Marni Nixon**
Tony	**～JimBryant**
Riff (Jet Song)	**～Tucker Smith**
Anita (A Boy Like That)	**～Betty Wand**

ナタリー・ウッドは全曲歌うつもりで、全曲録音していたが製作サイドからNGがでて吹き替えに決定。
(※ドキュメンタリーDVDでナタリー生歌を聞ける。Quintetは"ジャイアン指数"やや高め)
機嫌を損ねないように・・と、その事は撮影終了まで秘密に。後、吹き替えと知って
不機嫌になったものの、自分とよく似た声質の**マーニ・ニクソン**の歌声を気に入り了解。
最後、フィナーレ部分のSomewhereだけは生声らしい。
ラス・タンブリンはJet Song 部分だけアイス役の**タッカー・スミス**が歌っているが、
(※これもドキュメンタリーで聞ける) 本人は、「そんなに難しくなかったので使って欲しかった」と不満気。
リタ・モレノもA Boy Like Thatの高音部分がでなくて**ベティ・ワンド**に吹き替えになったものの、
「彼女の歌は感情をうまく表現できてないわ」と、やはり不満気。
唯一、リチャード・ベイマーだけが「僕の歌をちょっとでも聞いたら、あれが吹き替えだった
という事がすぐにわかるよ、わっはは!」と納得している・・・。
ちなみに**ジム・ブライアント**はトニーとは似てもにつかない感じらしい。
(コレクターズエディションDVDドキュメンタリーの確かな情報+ネットで見た不確実な情報参照)

◉映画と舞台とシンフォニック・ダンス

ミュージカル自体は1957年（バーンスタイン39歳）の作。
舞台の初日はブロードウェイで同年9月に上映。これを映画にしたのが1961年。
「シンフォニック・ダンス」も映画と同じ1961年の作で
同年2月13日、自らニューヨークフィルハーモニーの特別演奏会で初演を振った。
ダンスナンバーを中心に必ずしも劇の進行を追うものではなく、シド・ラミンと
アーウィン・コスタルにオーケストレーションをゆだねてコンサート用の
管弦楽組曲として効果的に構成されたもの。

〈シンフォニックダンスの曲順〉

1 **Prologue**

2 **Somewhere** adagio

3 **Scherzo** vivace leggiero

4 **Mambo**

5 **Cha-Cha** (Maria) andantino con grazia

6 **Meeting Scene**

7 **Cool** fugue allegro

8 **Rumble** molto allegretto

9 **.Final** adagio

♪コンサートに行くと、8番目の"Rumble"の山場でいったん演奏が止まるため
そこが終了だと思って拍手が起こる事が度々。まだ先がありますよ～!

top

WEST SIDE STORY

ウエストサイド物語

CHAPTER

1. ロゴ／序曲
2. JET BALLET 00455
3. シャーク団 00822
4. 街中の抗争 01111
5. シュランク警部とクラプキー巡査
6. JET SONG 01816 01444
7. トニーとリフ 02253
8. SOMETHING'S COMING 02558
9. 新しいドレス 02840
10. THE DANCE AT THE GYM 03217
11. PROMENADE/MAMBO 03711
12. 出会い 03854
13. MARIA 09407
14. AMERICA 09738
15. TONIGHT 05550
16. クラプキー巡査の嘆し 10257
17. GEE, OFFICER KRUPKE
18. 決闘の約束 11037 10604
19. 警部の二面性 11445
20. I FEEL PRETTY 12051
21. 結婚式 12800
22. ONE HAND, ONE HEART 13115
23. THE RUMBLE/TONIGHT 13254
24. トニーの仲裁 13614
25. ナイフ 13925
26. チノ、マリアに話す 14425
27. SOMEWHERE 14729
28. ベイビー・ジョンとAラブ 15105
29. COOL 15304
30. トニーを捜す 20029
31. A BOY LIKE THAT / I HAVE A LOVE 20225
32. マリア尋問される 20909
33. アニタ、ジェット団を訪ねる 21106
34. ドク、トニーに話す 21559
35. マリアの腕の中で 21902
36. エンド・クレジット 22621

STAFF

製作……ロバート・ワイズ
監督……ロバート・ワイズ／ジェローム・ロビンス
音楽……レナード・バーンスタイン

CAST

マリア……ナタリー・ウッド 1938－1981 映画撮影中 溺死
トニー……リチャード・ベイマー 1939－
ベルナルド……ジョージ・チャキリス 1934
アニータ……リタ・モレノ 1931 (84)
ロスアンゼルス 市内 テレビ局
ドクター トニー グッド エミー

●字幕翻訳：菊池浩司

雨に唄えば
Singin' in the Rain

1952年のミュージカル映画の傑作。映画にはこの映画のために書かれた曲以外の曲も多く含まれているが、特にタイトルナンバーはたびたびMGMの映画で使われ、多くのスター達が歌っている。ドナルド・オコナーの歌う「メイク・エム・ラフ」は新曲。

アメリカ映画協会（AFI）発表したミュージカル映画ベストの第1位、アメリカ映画主題歌ベスト100の第3位、アメリカ映画ベスト100のい第10位に選出された。

＜あらすじ＞

サイレント映画（音声のない）の時代に俳優ドン（ジーン・ケリー）と大女優リナ（ジーン・ヘイゲン）は映画スターだった。ハリウッドにトーキー（音声のある映画）の波が押し寄せ、声やセリフのまずい俳優は困りはてる。

ドンとその親友コズモ（ドナルド・オコナー）キャシーの三人は「リナの悪声」をつかわず映画をミュージカルに作り替えることを思い立ち、キャシー（デビー・レイノルズ）がセリフも歌も全て吹き替えることになる。

映画の試写会のカーテンコールでリナが生で歌うように迫られ、キャシーの歌声で「雨に唄えば」が披露され、吹き替えが観客にばれる。キャシーはスターの座を手に入れ、ドンとキャシーは結ばれる。

＜ミュージカル＞（まったく石井の私見）

オペラを気軽に楽しめる（セリフで劇がすすむ。自国の言葉を使う。）形でオペレッタが作られ今も世界中で親しまれている。オペレッタに踊りの要素を加えたのがミュージカルでニューヨークとロンドンを中心に今もさかんに上演されている。

人気のミュージカルは舞台だけではなく映画化され、「マイフェアレディ」「ウエストサイドストーリー」「サウンドオブミュージック」「王様と私」などが古いところで最近では「レミゼラブル」なども作られている。また、ディズニーなどを中心のアニメ（や実写版）もかなりミュージカルの要素も持っているだろう。特にティムバートン監督の「シザーハンズ」「チャーリーとチョコレート工場」などは異色を放っている。

日本でも宝塚や劇団四季などの上演もあるが、なかなか手軽に楽しむというところまでには至っていない。「舞子はレディ」「恋に唄えば」「歌う狸御殿」などの映画も、もうひとつのところというあたりと思う。

舞台芸術研究
後期第４回「雨に唄えば」

CLASS　　No.　　NAME

（1）　「雨に唄えば」の総合的感想を書いてみましょう。

（2）　「ミュージカルの持つ魅力」について自由に書いてみましょう。

※舞台芸術研究後半４回は終了になります。来年に向けて、何か全般にご意見あれば書いてください。